

# 東住吉 100 物語

公園・みどり

## 11. うるし堤公園

所在：今川1丁目平和橋

うるし

かつ うるし

南港通り辺りから 漆 堤公園辺りまでの今川の堤が、嘗て 漆 堤として秋の紅葉で有名で有ったことを記念して、平野区画整理後に設置された公園です。

現在は、昭和の中ごろに植樹された桜の名所として、春には夜桜見物のぼんぼりに席が奪い合いになる程の賑わいを見せています。

この堤から東は土地が低く、(昭和 30 年ころ迄は) 家も電柱などもなく、見渡す限り田んぼが続き、平野の大念佛寺辺りまで見通せました。又、西の方は家屋が少なくまばらで、西風が吹きぬけて凧揚げには絶好の場所でした。東の方に住宅が建ちはじめる昭和 40 年(1965 年)頃までは、お正月には大勢の子どもや大人があちこちから集まってきて、一緒になって堤の上に並んで凧が小さく見えるほど思いっ切り遠く・高くあげて、競い合い、楽しんだものでした。

春は、鶯がたどたどしい声で鳴き始め、春の訪れをいち早く告げてくれました。

梅雨に入ると、昭和 36 年～昭和 38 年(1961 年～1963 年)頃までは、川に食用蛙がたくさん棲み、「んぐうわ、んぐうわ、んぐうわ」と、その鳴き声に、話し声がかき消されるくらいでした。

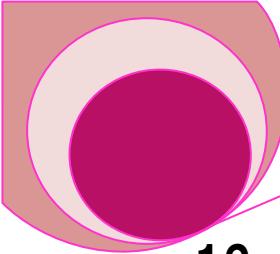
夏は、やんま、しおから等、子ども達はトンボ釣りに歓声を上げていました。蝉の合唱もすごかったです。枝から枝へ飛び交う蝉が、蝉獲りに集まる子どもの顔にぶつかるくらいでした。

しらさぎ がんこう

夕暮れには、堺の仁徳陵(南南西)の方に向かって 白 鶩 が 雁 行 して、次々と帰っていくのが見られました。

長閑な自然を肌で感じられる時でした。

現在も、白鶩の雁行は時折見られます。



### 12. 映画館物語

昭和 30 年～昭和 40 年（1955 年～1965 年）代は《戦後映画の黄金期》とよばれ、全国のどこの街にもたくさんの映画館が有りました。

一つ屋根の下、スクリーンに繰り広げられる音と映像によって、喜び、悲しみ、怒り、そして楽しさを共有することができる庶民の娯楽の場所であり、文化の発信基地でもありました。

館内で拍手や喝采をおくったものです。文字通りスターが輝いていた時代であり、スターは人々の憧れの対象そのものでした。チャンバラ映画のヒーローに胸をときめかせて、あちこちの路地裏や空き地で、夢中になってチャンバラごっこする子どもの姿も見られました。

ピーク時、昭和 33 年（1958 年）には、東住吉区だけでも 9 館の映画館があり、料金は三本立てで 55 円という所もありました。針中野駅前の針中野センター劇場に「サーカス」がやって来たこともあります。

また、映画館ではありませんが「光劇場」という小劇場が西今川町 1 丁目にあり、有名な浪花節や大衆演劇がよく上演されていたということです。

いくつもの映画館が時代とともに消え、最後に残っていた「田辺キネマ」も惜しまれつつ平成 24 年（2012 年）3 月 31 日に閉館し、時代の移ろいに寂しさを感じます。

1. 田辺キネマ 駒川町 6 丁目
2. 桑津敷島劇場 桑津町 2 丁目
3. 田辺松竹 田辺本町 4 丁目
4. 田辺大映 田辺本町 5 丁目
5. バンビ劇場 田辺本町 5 丁目
6. 北田辺映劇 田辺東之町 2 丁目
7. 針中野東映 鷹合町 1 丁目
8. 針中野センター劇場 駒川町 8 丁目
9. 矢田映画劇場 矢田富田町



「全国映画館名簿」該当部の抜粋コピー昭和 33 年（1958 年）4 月現在

## 13. 檼神社

所在：北田辺 1 丁目 8

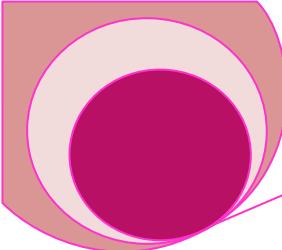
# 東住吉 100 物語

寺社・史跡・伝承

拝殿の裏に朽ちた大きな切り株が祀<sup>まつ</sup>られています。元は樹齢 800 有余年を数える榎の大木でした。土地の人々がこの木をご神体として社殿をつくり、年々参詣者も増加したので、昭和 27 年（1952 年）4 月に宗教法人となり、翌昭和 28 年（1953 年）に拝殿と社務所を設置した神社です。拝殿の奥には大国主命<sup>おおくにぬしのみこと</sup>、白髭明神<sup>しらひげみょうじん</sup>、楠玉大明神<sup>くすたまだいみょうじん</sup>などいろいろな神様が朱色の祠<sup>ほこら</sup>で所狭しと祀られています。神社ながら参道にはお地蔵さんが立ち並び、目が利くという水かけ不動が祀られ、百度石があり素朴な神仏混合の信仰の場となっています。

境内には旧桑津村と旧北田辺村の共同墓地の桑津墓地<sup>くわづぼち</sup>があります。参道脇に大きな石碑があり、墓地が行基菩薩により開かれたという伝説が記されていますが、事実は検証されていません。（035 桑津墓地参照）現在の住居表示：北田辺 1-8 に変更される前には、大塚町と呼ばれており、境内全体が小高くなっていることからここも古墳跡ではないかと推察されます。境内には数本の巨樹がありましたが平成 30 年（2018 年）の台風 21 号で損傷し、全て伐られ大きな切株だけが残っています。桜の名所もなくなりました。





## 14. 圓明寺

所在：照ヶ丘矢田 1 丁目 22

大阪の台所として有名な「黒門市場」が、明治時代に「圓明寺市場」と呼ばれていたことは、意外に知られていません。

江戸時代の文政年間、黒塗りの山門を構えた圓明寺が市場の西側にあり、その山門の前で魚商人らが市を出したのが起源といわれています。

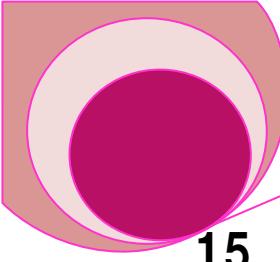
しかし、明治 45 年（1912 年）の難波大火で寺院・山門ともに焼失しました。

その後、「圓明寺の黒い門」が市場の名前として引き継がれ、「黒門市場」と呼ばれるようになり、戦後「大阪の胃袋」として賑わい始め、年末には 1 日約 15 万人以上が買い物に訪れます。

一方、「圓明寺」は照ヶ丘矢田に移転し、現在に至っています。

この場所は西除天道川の川跡で、天道川（天井川）が [磯歯津路](#)（長居公園通）と交差する南側にありますので、旧西除川をたどってみようとする人たちの、目印にもなります。





## 15. 息長川

# 東住吉100物語

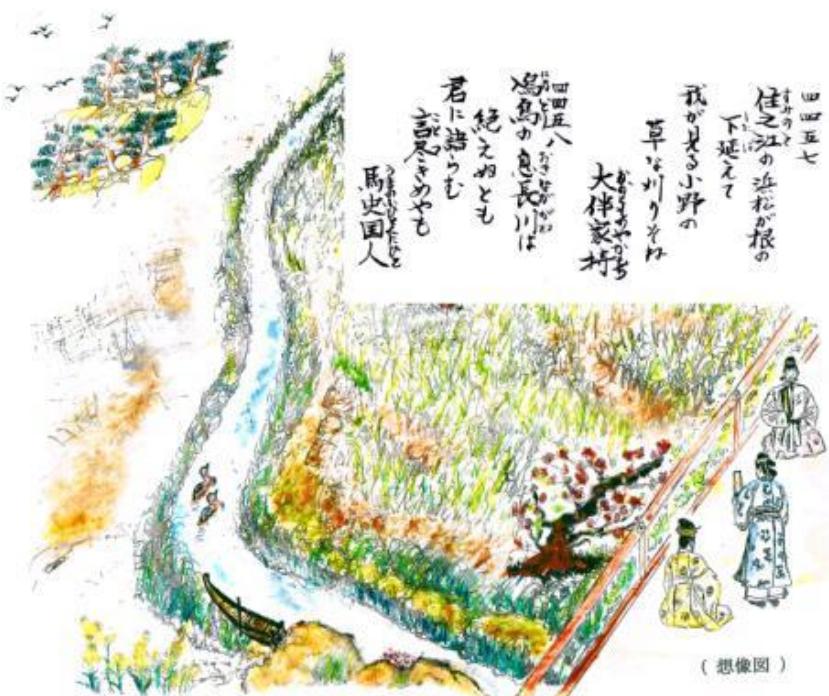
川・堀（環濠）・橋

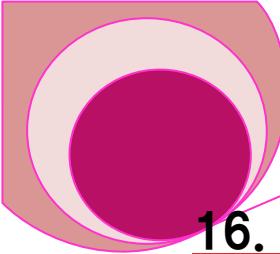
万葉集の巻20-4458番に「**鳩鳥**の 息長川は 絶えぬとも 君に語らむ 言尽きめやも」という歌があります。詠み人は河内国**伎人郷**  
 (現平野区喜連)の豪族、**馬史国人**で聖武天皇が難波の宮に向かう途中、馬史国人の館で宴を張ったときに詠されました。鳩鳥は力  
 イツブリの古語で、カイツブリは潜るのが得意なため「息の長い」の枕詞として使われています。歌の意は「息長川はたとえ絶え  
 てしまうことがあるとしても、あなたに語りたい言葉は決して尽きることはありません」です。歌われている息長川は、通説では近  
 江の天野川とされていましたが、東住吉区の郷土史家の三津井康純氏は河内を流れる西除今川という説を打ち出しました。三津井説  
 の支持者達は、奈良時代末期から平安初期に至る度重なる大洪水で、息長川の水源となる馬池谷筋が埋まり豊かな水量を維持してい  
 た「息長川」が姿を消し、どこの川か分らなくなってしまった。現在の今川  
 がその流れを汲むものだと考えています。

息長川がどの川であるか諸説ありますが、聖武天皇が難波へ<sup>ぎょうこう</sup>行幸<sup>くわうこう</sup>のおり。喜連の豪族ゆかりの地に關係することから平野区と東  
 住吉区の近くの川と考えるのが順当だと思われます。従来の学説を  
 覆す新説を打ち出した三津井氏の研究と情熱を顕彰する万葉歌碑  
 が中井神社の東鳥居近くに設置されています。

また、源氏物語の夕顔の巻では、初めての道行きに、光源氏が夕顔  
 に対して、何の説明もなく突然に「息長川と契り給ふよりほかのこと  
 なし」として、「末永い愛を誓って『息長川』を繰り返した」と「息長  
 川の歌」を引用しています。

文学界の通説ではこの台詞<sup>せりふ</sup>は、古歌を書き写した屏風絵や歌扇に書かれ、また鳩鳥の歌も歌人に広く詠まれていたため、「息長川」と言えば  
 「誠実な恋」を意味するものと考えられていたようです。しかし国人  
 の歌意は恋ではなく、客人・大伴家持の挨拶歌に対する答礼歌であつた（鴻巣盛廣説）とされています。





## 16. 奥村橋石碑

所在：桑津1丁目31・33間

杭全交差点から国道25号を西へ行き、まもなくJR大和路線の高架下をくぐり、更に20mほどいったところに橋があります。駒川に架かる橋で、国道が広いので、橋とは思わず通り過ぎてしまいますが、桑津1丁目31番と33番のあいだに架かっています。

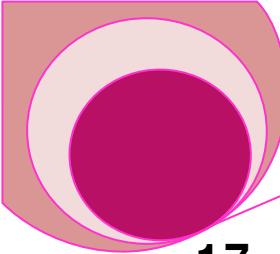
この橋が、昔の、四天王寺や舎利寺へ行く道をさえぎる今川・駒川を渡る、ちょっとした要衝でした。

何回か架け替えられた今の橋の四方の袂<sup>たもと</sup>の銅板に、「奥村橋」「おくむらばし」の銘が入れられています。

「奥村本家林右衛門、隠居して道清、88歳米寿（ますかけ）の内祝いに、私財をもって石橋（渡り三間半、幅二間半、厚さ八寸八枚掛、中柱のもの）を寄付。お上は、「奇特なこと」とて特に橋名に奥村と入れることを允許。嘉永6年（1853年）11月3日わたり初め式があり、正念寺正寿が法事、隠居道清が嗣子林右衛門と袴<sup>かみしもたいとうすがた</sup>帶刀姿で渡り村人と紅白の餅一石五斗を撒いた」と古記録にあります。

- ・架橋年…嘉永6年（1853年）11月
- ・標柱…現在の標柱は、初代の脇石を用いたので、その断面は膨らみのある不等辺四角形（もと、東詰南側に立っていたが、昭和32年（1957年）6月国道の改修の為、現在の西側南詰めへ。昭和36年（1961年）1月鉄枠にて補修。昭和61年（1986年）九月国道大改修に際して少し掘りあげて再度補修し、昭和62年（1987年）6月現状のようになる。）
- ・標記…正（西）面 奥村橋
- ・裏（東）面 嘉永六年癸丑十一月吉辰
- ・左側（北）面 平野郷今在家村
- ・八十八翁奥邑道清架之（その下に埋もれて）、林右衛門 管之
- ・揮毫者・・・奥村富三郎  
(奥村林蔵氏記録より抜粋)





## 17. 開高健文学碑

所在：北田辺 4 丁目 16

開高健は昭和 5 年(1930 年)に天王寺区平野町に生まれ、父親は小学校教員でした。

7 歳の時に北田辺に転居し、北田辺小学校を卒業、昭和 18 年(1943 年)に旧制天王寺中学(50 期生)(現・大阪府立天王寺高校)へ入学しましたが、在学中に父親が病没し苦学しました。

第二次大戦後、旧制大阪高等学校文科(英語)に入学し、学制改革により、翌年大阪市立大学法文学部法学部に編入(大学 1 期生)しました。

大学在学中に谷沢永一主宰の同人誌『えんぴつ』に参加、昭和 27 年(1952 年)1 月に同人仲間の牧羊子と結婚します。羊子の紹介で壽屋(現サントリー)宣伝部に中途採用され、PR 誌『洋酒天国』の編集やウイスキーのコピーライターとして有名となります。

この頃に芥川賞を受賞(裸の王様)し、独立し文筆業に専念します。

昭和 39 年(1964 年)に朝日新聞社臨時特派員としてベトナムの最前線に出ました。

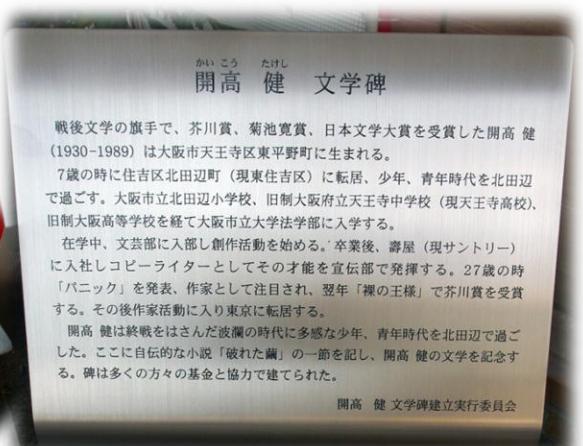
反政府ゲリラの銃撃に遭ったが、総勢 200 名の内 17 名の生還者の一人でした。

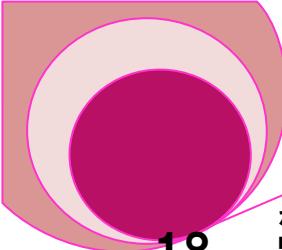
ベトナムでの戦争体験を描いた「ベトナム戦記」でドキュメンタリー作家としても有名になります。また、釣り師、グルメとしても知られています。日本文学大賞、川端康成賞、菊池寛賞、谷崎潤一郎賞、毎日出版文化賞、読売文学賞など受賞も多数あります。平成元年(1989 年)に食道癌の手術を受けましたが、その後、食道腫瘍や肺炎を併発して 58 歳で死去し、墓所は鎌倉・円覚寺にあります。

死後、開高の業績を記念して開高健ノンフィクション賞が創設されました。

また、後半生の 16 年間を過ごした神奈川県茅ヶ崎市に開高健記念館

が開設されています。当顕彰碑は開高健が北田辺に住んだ少年、青年の頃を記念して、有志の募金により実家があった近くの近鉄北田辺駅前に平成 17 年(2005 年)11 月 5 日建立されたものです。





## 18. 覚林寺の井戸と堤

所在：湯里4丁目16-9

# 東住吉100物語

寺社・史跡・伝承

真宗大谷派に属する覚林寺の西側を旧狭山西除天道川(西除川)が北上しており、その左岸と思われる場所は現在も南北に小高く堤の名残があります。

また、地名の「湯里」にあるように、江戸期には「[湯屋島村](#)」とか「湯谷村」と呼ばれて、温泉が湧出する地でもありました。寺の西隅に枯渇した井戸があり、これが温泉跡と言われています。

しかし、「摂津郡談(注1)」によれば、元禄(1688年～1703年)の頃には既に枯渇し、『その旧泉を慕い井を掘らしめ湯谷井という』と述べられています。

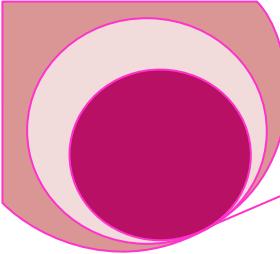


### 覚林寺の井戸

(注1)「摂津郡談」

元禄14年(1701年)に刊行された摂津国の中誌。原本は17巻17冊からなり、当時の名所旧跡、神社仏閣などが細かく書かれています。とりわけ和歌を尊重していたようで、地方の和歌名所を詠んだ歌の収録集的な体裁をとっています。





# 東住吉 100 物語

寺社・史跡・伝承

## 19. 枯木八幡宮

所在：公園南矢田4丁目5

旧枯木村の古い町並の中に「こんなところに」と驚くくらい、さりげなく枯木八幡宮があります。

かつての枯木村という地名に由来する社名の小さな神社です。

祭神はほのいかづちのかみ火雷神で、雷除や火災予防の神様とされています。

由緒は不明ですが、境内の土を屋根土に混せておくと、落雷しないとの伝承があります。

